

令和3年(2021年)7月27日

令和3年度・夏休み前の全校集会

「オリンピックの風景について考える」

長野県蘇南高等学校長 小川幸司

1 オリンピックと「唯一の正解のない課題」

7月23日に東京オリンピックの開祭式が行われました。コロナ第5波のなかで世界中から大勢の人が集まる大会をやらねばならないのかという強い批判が渦巻く中での大会です。一方で、日本政府や東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の立場からすれば、世界中の巨額のお金が動き、大勢の人々が関係するオリンピックという世界最大規模のイベントをこれ以上先延ばしにすることはできないという判断だろうと思います。開催国の日本が払わなければならない予算だけでも1兆6440億円にのぼるのです。

どちらの言い分にも根拠があり、私たちの身の回りにある、「唯一の正解のない課題」の典型的な事例なのでしょう。蘇南高校の学びが大切にしていることの一つに、唯一の正解が存在しない課題に対して、自分なりに一番適当ではないかと思える答え(最適解)を見出す「判断力」を身につけていく学びがあります。オリンピックはやるべきだったのか、そうでなかったのか。是非、皆さんが自分なりの考えをもってください。そして友達同士で対話をし合えればいいですね。

2 オリンピック憲章の根本原則

そのうえで、ともかくオリンピックは開催されているので、高校生としての目線で気づいてほしいことをいくつか皆さんに問題提起します。

まず、オリンピックは「オリンピック憲章」にもとづいて行われますが、その「根本原則」には、「スポーツをすることは人権の1つである。すべての個人はいかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる」とうたわれています。

いかなる差別も受けることなく、スポーツをするチャンスがすべての人に保障されることが、大切にされています。

3 出身国による差別をしない知恵

では、人類にはどのような差別があるのでしょうか。ジェンダーによる差別、障がい者への差別は、皆さんもすぐに思いつくでしょう。

その他に、オリンピックでは出身国による差別を乗り越えることが重視されています。選手たちは「国の代表」ではなく、「国や地域の代表」と言われていることに気づいていますか。

例えば、現実には国のようなのに、国際連合からは国として認められていない人々が

います。代表的なのは、日本の隣にある台湾です。毛沢東の共産党政権が1949年に中華人民共和国（中国）を樹立した時、内戦に敗れた国民党の蒋介石が台湾島に逃れて別の政権を樹立したのが、こんにちの「中華民国（台湾）」の起源です。中国は台湾を国として扱うことに強く抗議をします。しかし、オリンピックでは、「国や地域の代表」という考え方をすることで、台湾の選手たちも対等に参加することができます。これはオリンピックの素晴らしい知恵だと思いませんか。

開祭式をTVで見ていた人は気づいたと思いますが、選手の入場行進で最初に歩くのは、オリンピックの故郷ギリシアの選手団で、その次を歩くのは「難民選手団」です。故国が内戦であったり、政治的迫害を逃れたりして国の代表になれない人々も、オリンピックに参加できるのです。

4 「人種」差別はなぜ生まれるか

人種や民族に対する差別も厳しく禁じられています。女子サッカーのイギリス対アルゼンチン戦で、国歌が斉唱された後、両方の選手たちがピッチに片足の膝をつけて膝まずつくようなポーズをとりました。これはアメリカの黒人人種差別に反対するブラックライブズマター運動（黒人の命を守る運動）への共感を示すものです。かつてはオリンピックで政治的な意思表示をすると追放処分を受けることがしばしばありました。しかし今ではIOCもこのような世界の正義を目指す行為を認めるようになってきています。選手たちは、自分の競技に勝つことだけではなく、よりよい世界を作ることを目指しているのです。

ところで、皆さんは「人種・民族」という人間の区分はどのような基準にもとづくものだと思いますか。おそらく「人種・民族」は祖先からの血統を受け継いでいる集団であり、人種の場合には肌の色に着目した区分であり、民族の場合には言語とか文化に着目した区分だという答えが多いでしょう。2代前のアメリカ大統領は、黒人初の大統領と言われたオバマですが、彼はアフリカ系の父と白人の母の間に生まれたダブル（ミックス）なのです。しかし「黒人初」という呼称がつくのは、アメリカ社会が長く「血の一滴原則」を掲げてきたからです。一滴でも黒人の血が混ざっていれば黒人と見なすという発想です。つまり繰り返し様々な人々が混ざり合ってきた人類なのに、無理やり人間が線引きをしたのが「人種」という概念なのです。

5 「民族」差別はなぜ生まれるか

同じことは、第二次世界大戦中に、ドイツのヒトラーが大虐殺の対象とした「ユダヤ人」に対しても言えます。ヒトラーはユダヤ人がこの世からいなくなれば世界が平和になるというとんでもない妄想を扇動したわけですが、実際に510万人ものユダヤ人をアウシュヴィッツ絶滅収容所などで殺害しました。ではユダヤ人とは誰なのでしょう。当時のドイツ社会では、祖父母の代まではユダヤ教を信じていたが父母や自分とはもはや信じていないという人がたくさんいました。そこでヒトラーはニュルンベルク法を定めて、祖父母4名のうち3名以上がユダヤ教徒であった者を「完全ユダヤ人」として迫害対象としました。

つまりユダヤ人のような「民族」というものも、そのときどきの人々が勝手に線引き

をして作ってしまう概念なのだと言えます。そんな勝手な線引きで、ある特定の人々の生きる権利を否定するというのが、どれほど根拠のない身勝手な行為であるか、皆さんはもう想像できるでしょう。

人種差別とか民族差別というのは、根拠なく特定の人々を線引きし、彼らの「いのち」の尊厳を否定する行為なのです。なぜそんなことをするのでしょう。それは人を否定すると自分が偉い存在に思えるからです。自分はそんなことをしないとでも思っている、ふとしたときに人間は誰かを迫害したくなる性質を持っているのだと思われまます。だからこそ、冗談でも誰かを否定する言動をとってはいけないのです。

東京五輪の開祭式の演出に携わっていた人が、過去にユダヤ人虐殺を茶化すようなお笑いネタを披露していたことが判明して解任されました。国際社会のルールでは、それが当然になっています。日本のテレビでお笑い芸人が、「死ね」「殺す」ということばを気軽に使っている風潮は、日本社会の人権感覚の欠如を物語っているのです。

6 「かけがえのない個人」

オリンピックという4年に一度の国際競技大会には、互いの「いのち」を尊重するというメッセージがこめられています。オリンピックに賛成でも反対でも、そのことに思いをいたすことがあっていい。ジェンダー・障がいの有無・人種・民族などに関係なく、すべて人は「かけがえのない個人」として尊重されるのです。

さて、今日で夏休み前の授業が終了します。

インターハイ予選などの大会・発表会、蘇峽祭をはじめとする生徒会行事、日々の授業など、皆さんの精一杯取り組む姿がとても印象的であった4カ月でした。3年生はこれから就職・進学に向けての大切な日々が始まります。1・2年生にとっては宿題を進めつつ、自分のやりたいことに思い切りうちこめるような夏休みの日々を過ごしてください。

皆さんは「かけがえのない個人」です。

これからも皆さんのことを心から応援していきます。